

病める者たちへの書簡

サイード・ヌルスィー

リサーレ・イ・ヌール全集より

第二十五の光

書名：病める者たちへの書簡

著者：ベディーウツザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語原著より翻訳：ナオキ・ヤマモト

発行所：レイハン出版

発行年月：2026年3月

印刷所：IMAK（イスタンブル、トルコ）



著作権 © レイハン出版 2026

ISBN：978-83-63796-44-0

病める者たちへの書簡

サイード・ヌルスィー



2026年3月

「そして、わたしが病にかかるとき、
かれがわたしを癒される。」



第二十五の光

（これは二十五の処方である）

（病める者への薬となり、慰めとなり、霊的な処方箋となり、見舞いと「過ぎ去れり」と告げる語の座において記されたものである。）

注意と陳謝

この靈的処方箋は、これまでに記したい
かなる文よりもはるかに迅速に^{1傍注}書いた
ままで、通常とは異なり、校正や推敲の暇
も得られず、著述そのものと同じ速さで、
ただ一度だけ見返したにすぎぬ。ゆえに初
稿のままのように入り乱れたところも残っ
ている。心に自然に湧き出た思念を、技巧
や過度の注意によって損なわぬため、改め
て精査することは不要とみなした。読む方
々、ことに病める方々は、不快に響く文や
難解な語彙に出会っても心を閉ざさず、我
に祈りを寄せてくだされば幸いである。

¹ 傍注：この小冊子は四時間半のあいだに著され
た。確かにリュシュドウ、確かにレフェト、
確かにヒュスレヴ、確かにサイード

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

الَّذِينَ إِذَا أَصَابَتْهُمْ مُصِيبَةٌ قَالُوا إِنَّا لِلَّهِ وَإِنَّا إِلَيْهِ
رَاجِعُونَ * وَالَّذِي هُوَ يُطْعِمُنِي وَيَسْقِينِ * وَإِذَا
مَرَضْتُ فَهُوَ يَشفِينِ

この光においては、人類の十分の一を占める災厄と病を負う者たちへ、まことの慰めとなり得る二十五の処方要点のみ述べる。

第一の処方

おお、いたましき病者よ。憂いを抱くなく、耐え忍べ。そなたの病は、そなたへ災いではなく、むしろ一種の薬である。生命と一つの資本であり、過ぎ去るものである。その実りを得ねば損失となる。しかも安逸と怠惰のうちにあれば、資本はたちまち失われる。

病は、そなたのその資本を大いなる利をもって実り豊かなものとする。さらに、寿命がいたずらに過ぎ去るのを許さず、それを引き留め、かえって長くするのである。

かくて、病がその実りを与えしのち、去りゆくを待つべし。まさに寿命が病によりて長くなることを指す故事として、世に広く語られる諺がある。「災厄の時はきわめて長く、安楽の時はきわめて短い」と。

第二の処方

おお、忍耐を欠く病者よ。耐えよ、いや感謝すべし。そなたのこの病は、人生の一刻一刻を、一時間の礼拝に等しき価値へと

高め得る。というのも、礼拝は二種ある。一つは陽なる礼拝であり、祈りや嘆願のようによく知られた礼拝である。他の一つは陰なる礼拝であり、病や災厄によって人が自らの無力と弱さを知り、慈悲深き造り主へと身を寄せ、懇願し、純粹で偽りなき霊的礼拝へと導かれるものである。

まことに、病のうちに過ごした生涯は、アッラーに不平を述べぬかぎり、信仰者にとって礼拝とみなされるという正当な伝承がある。さらには、忍耐し感謝する病者の一分の病が一時間の礼拝に匹敵し、ある成熟した魂においては、その一分が一日の礼拝に比肩するということも、確かな伝承と真実の霊的証言によって確立している。

ゆえに、そなたの一分の生を千分の価値に高め、長き寿命を獲得させる病に対して、嘆くよりむしろ感謝すべきである。

第三の処方

おお、堪え難きを覚える病者よ。

人がこの世に快樂をむさぼり、甘美を味わうために来たのではないことは、次々に来

ては去り、若者が老い、絶えず滅びと別離に転がり込んでゆく現実が証している。しかも人間は、命あるもののうちで最も完成され、最も高く、その装備において最も豊かであり、むしろ生命あるものの王とも言うべき存在であるにもかかわらず、過ぎし楽しみを思い出し、来るべき災厄を思い悩むがゆえに、獣よりも下の境涯に落ち込み、ただ憂いと苦難の生活を送る。

ゆえに人は、この世にただ美しく生き、安らぎと快樂のうちに歳月を過ごすために来たのではない。むしろ大いなる資本を手にした人は、ここにおいて取引し、永遠に続く来世の幸福を得るために働くべく遣わされたのである。その手に与えられた資本こそ寿命である。

もし病がなければ、健康と安穩は人を怠惰へと誘い、この世を美しく見せ、来世を忘却させる。墓と死を思い起こすことを避け、寿命という資本を空しく風に散らしてしまう。だが病は突如として目を覚まさせる。肉体と身に向かって語りかける。「汝は不死ではなく、放埒でもなく、務めがある。驕りを捨て、汝を造りし方を思え。墓

へ向かうことを知り、その備えをせよ」と
。

まさしく病は、この観点からすれば、決して欺くことなき忠告者であり、目覚めを促す導き手である。ゆえにそれに不平を述べるのではなく、この側面においてはむしろ感謝すべきであり、もし重く感じられるなら、耐え忍ぶ力を求めるべきである。

第四の処方

不平を訴える病者よ、汝に相応しき是不平にあらず、感謝と忍耐である。なぜなら、汝の身体、ならびにその諸肢・諸機能は、汝自身の所有ではない。汝はそれらを自ら造ったのでもなく、いずこかの工房より買い求めたのでもない。ゆえにそれらは他者の所有物である。その所有者は、自らの所有において、望むままに処置する権利を有する。

『第二十六の言葉』において述べられたがごとく、たとえば、きわめて富み、かつきわめて熟達した一人の職人が、その見事

なる技と貴重なる財を示すため、貧しき一人の者に、わずかな報酬と引き換えに、短き時間、モデルの役を担わせ、宝石を散りばめた、きわめて精巧なる衣をその者に着せるとする。彼はその衣の上で、さまざまな作業と姿勢を与え、驚くべき多様な技を示すために、切り、替え、伸ばし、縮める。さて、この報酬を受け取った貧しき者が、その職人に向かい、「私に苦勞を強い、屈み立ちの姿勢で私を煩わせ、私を美しくしているこの衣を切り縮めて、私の美を損なっている」と言う権利があろうか。「無慈悲であり、不当である」と非難し得ようか。

まさにこの譬えのとおりである。威光の創造主は、病者たる汝に対し、眼・耳・理性・心といった光り輝く諸感覚を宝飾として縫い込んだ身体という衣を着せ、美しい御名の刺繍を示すため、汝を多様な状態の中で巡らせ、さまざまな姿へと変化させる。汝が飢えによって「養う御名」を知るがごとく、病によってもまた「癒す御名」を知るのである。

苦痛や災厄は、御名のうちのある側面の働きを顕わすがゆえに、その内には叡智のきらめきがあり、慈悲の光が射している。その光の中には、多くの美が宿っている。もし覆いを取り払われるなら、汝が忌み嫌い、恐れている病の幕の背後に、愛すべき美しき意味を見いだすであろう。

第五の処方

病に冒された病者よ。われはこの時代における自らの経験によって、次の確信に至った。病は、ある人々にとって神よりの賜与であり、慈悲よりの贈り物である。ここ八、九年のあいだ、われには本来その資格もないのに、若き人々が病を縁として祈りを求め、われを訪ねてきた。注意して見るに、病を負う若者は、他の若者に比して、来世を思うようになり始めている。彼らには若さの酔いがなく、無自覚のうちに沈みがちな動物的欲望から、ある程度、自らを救い出している。

われは彼らを見て、その忍耐の範囲にある病を、神よりの賜与であると告げた。言っ

たのである。「兄弟よ、われは汝のこの病を憎んではない。ゆえに病を理由として汝を憐れみ、哀れんで祈るのではない。この病が汝を完全に目覚めさせるまで、忍耐に努めよ。病がその務めを終えたなら、慈悲深き創造主が、もし望まれるなら、汝に癒しを与えられるであろう。」

さらにこうも言った。「汝の同輩のある者たちは、健康という災厄によって無自覚に陥り、礼拝を捨て、墓を思わず、神を忘れ、つかのまの現世的快樂の表面の楽しみのために、無限なる永遠の生命を揺るがし、損ない、あるいは破壊してしまう。だが汝は、病の眼をもって、必ず赴く宿である墓を、さらにその先にある来世の住処を見て、それに即して行動している。ゆえに汝にとって病は健康であり、彼らにとっての健康は病なのである。」

第六の処方

苦痛を訴える病者よ。汝に問う。過ぎ去った生涯を思い返し、その中の楽しく安らかな日々と、災いと苦痛に満ちた時を想起

せよ。必ずや「おお、ありがたい」と言うか、あるいは「ああ、残念だ」「ああ、悔しい」と心または舌が語るであろう。

よく見よ。「おお、ありがたい」と感謝を呼び起こすのは、汝の身に起こった苦痛や災厄を思い返すことである。それは精神的な快を掘り起こし、心を感謝へと導く。なぜなら、苦痛が去ること自体が快だからである。あの苦痛や災厄は、その消滅によって、魂のうちに一つの快を遺産として残し、思い返すたびにそれが掘り起こされ、魂から快が流れ出し、感謝があふれ出る。

これに対し、「ああ、残念だ」「ああ、悔しい」と言わせるのは、かつての楽しく安逸な状態である。それらは失われることによって、魂のうちに恒常的な痛みを遺産として残し、思い出すたびにその痛みが再び掘り起こされ、後悔と嘆きを流し出す。

一日の不正な快樂が、時に一年もの精神的苦痛をもたらすのに対し、一日の一時的な病による苦痛は、多くの日にわたる報いとしての精神的な快とともに、その消滅に伴う解放と救済の快をもたらす。ゆえに、今まさに汝の身にあるこの一時的な病の結末

と、その内奥に秘められた報いを思い、「これもまた過ぎ去る」と言って、不平の代わりに感謝せよ。

第六の処方²〔脚注〕

現世の快樂を思い、病のために苦しむ兄弟よ。もしこの世が永遠であり、われらの道に死がなく、別離と消滅の風が吹かず、災厄に満ちた嵐のごとき未来に精神の冬がなかったなら、わたしもまた汝とともに、その境遇を憐れんだであろう。

しかし、この世界がいつか必ず「さあ外へ」とわれらに告げ、われらの叫びに耳を塞ぎ、追い出す存在である以上、われらはそれが追い出す前に、これらの病という警告によって、あらかじめこの世への執着を捨

² 〔脚注〕 この一節は、自然な流れの中で靈感的に想起されたため、第六の位において二つの治療が記されることとなった。その自然性を損なわぬため、あえてそのまま残し、あるいはそこに一つの秘義があるやもしれぬとして、改めなかった。

てねばならぬ。それがわれらを捨てる前に、われらが心においてそれを捨てる努力をせねばならぬのである。

まことに病は、この意味をわれらに告げ、こう語る。「汝の身体は石や鉄ではない。常に分離と解体にさらされる、さまざまな要素から成り立っている。驕りを捨て、自らの無力を悟り、所有者を知り、己の務めを理解し、何のためにこの世に来たのかを学べ」と。病は、心の耳に密やかにこの警告を囁くのである。

さらに、そもそも現世の快樂と楽しみは持続しない。とりわけ正当でないものであれば、はかなく、苦痛を伴い、しかも罪深い。ゆえに、その快樂を失ったからといって、病を口実に嘆くな。むしろ、病の中にある精神的な礼拝としての側面と、来世的な報いの側面を思い、それにおいて喜びを見いだすよう努めよ。

第七の処方

健康の快を失った病者よ。汝の病は、健康における神的恩恵の味を奪うものではな

い。むしろそれを味わわせ、いっそう増し加えるものである。なぜなら、一つのものが持続すれば、その影響力は薄れるからである。

実に、真理を究める人々は一致して次のように語っている。

انَّمَا الْأَشْيَاءُ تُعْرَفُ بِأَضْدَادِهَا

たとえば、闇がなければ光は知られず、その味わいも乏しい。寒さがなければ温もりは理解されず、喜びを伴わない。空腹がなければ食事は快を与えず、胃の熱がなければ水を飲むことも楽しみとならない。病がなければ安寧は味気なく、苦患がなければ健康は無味となる。

英知ある創造者が、人にあらゆる恩恵を実感させ、それぞれの種類の賜物を味わわせ、常に感謝へと導こうとされたことは、この宇宙に存在する無数多様な恩恵を味わい、認識できるほどに、数多くの機能を人に授けたことから明らかである。ゆえに、健康と安寧を与えると同時に、必ずや病、患い、苦悩も与えられるのである。

ここで汝に問おう。もしこの病が、汝の

頭にも、手にも、胃にもなかったなら、汝は頭・手・胃の健康に宿る、快く喜ばしい神の恩恵を感じ、感謝したであろうか。断じて否である。感謝するどころか、それを思いもしなかったであろう。そして無自覚のまま、その健康を享樂や放縱に費やしたに違いない。

第八の処方

来世を思う病者よ。病は石鹼のごとく、罪の汚れを洗い流し、清める。病が罪の贖いとなることは、確かなハディースによって立証されている。さらに伝承には、こうある。熟した木が揺すられると、その実が落ちるように、信仰ある病者の震えもまた、その罪を振り落とす、と。

罪とは、永遠の生命における恒常的な病である。この現世においても、心・良心・魂にとっての靈的な病である。もし汝が忍耐し、不平を口にしないなら、この一時的な病によって、数多の永続する病から解き放たれるのである。

もし汝が罪を思わず、あるいは来世を知ら

ず、また創造主を知らぬなら、汝の内には、今の小さな病よりも、百万倍も恐ろしき病がある。その病こそ、嘆くべきである。なぜなら、汝の心・魂・自己は、全世界の存在と関わりを持ち、その関わりは絶え間ない別離と消滅によって断たれ、汝の内に無数の傷を生じさせるからである。とりわけ来世を知らぬがゆえに、死を永遠の消滅と想像するなら、まるで全身が傷だらけの、世界ほどの大きさの病を負った身体を抱えているかのようである。

ゆえに、まずはこの無数の傷と病を抱えた巨大な霊的身体に対し、確かな薬、確かな癒しとなる信仰という霊薬を求め、信念を正さねばならぬ。その薬へ至る最短の道は、この物質的な病が引き裂いた無自覚の幕の下に現れる、無力と弱さの窓を通して、威力と慈悲を備えた創造主を知ることである。

創造主を知らぬ者の頭上には、世界を満たすほどの災厄がある。創造主を知る者の世界は、光と霊的歓喜に満ちる。信仰の強さに応じて、それを感じ取るのである。この信仰から生ずる霊的歓喜と癒しと味わいの

下で、わずかな物質的病の苦痛は溶け、碎かれる。

第九の処方

創造主を知る病者よ。病における苦痛、怯え、恐れは、病が時に死へと通ずるといふ側面から生じる。無自覚の眼、表面的な見方において、死は恐ろしく見えるがゆえに、それへ至る可能性を持つ病が、人を脅かし、不安にさせるのである。

まず知れ。そして確信せよ。定められた死期は決まっており、変わることはない。重篤な病者の枕元で泣いていた者たちが先に亡くなり、重病であった者が癒えて生き永らえた例は、数多ある。

次に知れ。死は、外見上思われるほど恐ろしいものではない。多くの書において、疑いなく、断定的に、啓典の与える光によって証明してきたとおり、信仰ある者にとって死とは、生命の重荷たる務めからの解放であり、この世という試験場における訓練と奉仕としての礼拝からの休止であり、先に旅立った親族・友人の九十九パーセント

と再会するための手段であり、真の故郷と永遠の幸福の座へ入るための道であり、この世の牢獄から樂園の庭への招待であり、慈悲深き創造主の恩恵として、奉仕に対する報いを受け取る順番なのである。

死の本質が真理の観点においてこのようなものである以上、それを恐怖の眼で見るべきではない。むしろ、慈悲と幸福の前触れとして見るべきである。なお、靈的完成者の一部が死を恐れたのは、死そのものが恐ろしかったからではない。より多くの善を得たいという願いから、生命の務めを続けることで積み重ねられる善行を惜しんだのである。

まことに、信仰ある者にとって死は慈悲の門であり、迷妄にある者にとっては、永遠の闇の井戸である。

第十の処方

無用の心配に囚われる病者よ。汝は病の重さゆえに心配している。その心配こそが、病を重くする。病を軽くしたいなら、心配を手放すよう努めよ。すなわち、病の益

と報い、そして速やかに過ぎ去ることを思い、心配を除き、病の根を断て。

実に心配は病を二重にする。物質的な病の下に、心配という霊的な病を心に与え、物質的な病はそれに支えられて長引く。もし委ねと受容をもって、病に内在する叡智を思うことで心配が消えれば、その物質的病の重要な根は断たれ、軽くなり、部分的には去っていく。

とりわけ、妄想によって一兎の物質的病が、心配を媒介として十兎にも膨らむことがある。心配が断たれれば、その病の十分の九は去る。心配は病を増すだけでなく、神の叡智を疑い、神の慈悲を批判し、慈悲深き創造主に不平を申し立てるに等しいため、目的に反して打撃を受け、病をさらに増やす。

まことに、感謝が恵みを増すように、不平は病と災厄を増大させる。しかも心配そのものも一つの病である。その治療薬は、病の叡智を知ることにある。叡智と益を知ったなら、その軟膏を心配に塗り、解き放たれよ。「ああ」と嘆く代わりに「よし」と言い、「ああ残念だ」の代わりに「いかな

る状態においても感謝すべきである」と唱えよ。

第十一の処方

忍耐を欠く病の兄弟よ。病は、今ここにある苦痛を与える一方で、過去の病が消え去ったことに伴う霊的な喜びと、その報いに由来する魂の喜びを、今日に至るまで与えてきた。今日から、いや、この時から先には病はない。ない以上、苦痛もない。苦痛がなければ、苦悩もない。

汝に忍耐が欠けるのは、誤った想像に囚われているからである。なぜなら、今日以前のすべての病の時間は、物質的には去り、その苦痛も共に去った。残ったのは、汝の内にある報いと、消滅に伴う喜びである。本来なら利益と歓喜をもたらすべきそれらを思って苦しみ、忍耐を失うのは、狂気に等しい。

未来の日々はまだ来ていない。来ていないものを今から思い、存在しない一日に、存在しない病、存在しない苦痛を想像して苦しみ、忍耐を失うとは、三重に「無」に存

在の色を与えることであり、狂気でなくて何であろうか。

この時より前の病の時間は、すでに歓喜をもたらしている。さらに、この時より後の時間は未だなく、病もなく、苦痛もない。ゆえに、至高なる御方が汝に与えたすべての忍耐の力を、あちこちに散らすな。この瞬間の苦痛に向けて集めよ。「忍耐を司る御名よ」と心に呼びかけ、耐え抜け。

第十二の処方

病のゆえに礼拝や日々の読誦を行えず、その欠如を悲しむ病者よ。知るがよい。確かな伝承によれば、敬虔なる信徒は、病のために行えなかった常の誦持についても、病中においてなお、その報いを得る。義務の礼拝を可能な限り果たす病者は、忍耐と委ねをもって義務を守ることにより、その重き病の時に於いて、他の随意の実践に代わる働きを、しかも純粋なかたちで果たす。

また病は、人の内なる無力と脆弱を実感させる。その無力の舌と脆弱の言葉によって

、状態としても言葉としても、祈りを生じさせる。至高なる御方は、人に無数の無力と尽きぬ脆弱を与えられた。それは、常に神の御前に逃れ、嘆願し、祈るためである。

قُلْ مَا يَعْبُؤُا بِكُمْ رَبِّي لَوْلَا دُعَاؤُكُمْ

すなわち、「もし汝らの祈りがなければ、汝らに何の価値があろうか」というこの節の秘義が示すとおり、人の創造の叡智と価値の理由である誠実な祈りと嘆願の一因が病である以上、この観点からは不平ではなく、神への感謝こそが相応しい。病が開いた祈りの水門を、健康を得たからといって閉ざしてはならぬ。

第十三の処方

病を嘆く不憫な者よ。病は、ある人々にとっては重要な宝であり、きわめて尊い神よりの贈り物である。いかなる病者も、自らの病をその類のものとして受け止めることができる。

死期が定められていない以上、至高なる御方は、人を完全な絶望と完全な無自覚から救うため、恐れと希望のあいだに置き、また現世と来世の双方を保全するため、その叡智によって死期を秘された。いつ死が訪れるか分からぬがゆえに、もし人が無自覚のうちにそれに遭えば、永遠の生命に甚大な害を及ぼし得る。病は無自覚を散らし、来世を思わせ、死を想起させ、かくして備えを整えさせる。中には、二十年かけても得られなかった段階を、二十日のうちに得る者さえいる。

例として述べよう。われらの仲間に、二人の若者がいた。一人はイラマ出身のサブリ、もう一人はイスラームキョイ出身のヴェジルザーデ・ムスタファである。この二人は、筆を執らぬ者でありながら、誠実さと信仰奉仕において、わが弟子たちの中で最前列に立っていた。わたしはその理由を知らなかったが、彼らの死後に理解した。二人には、いずれも重要な病があったのである。その病の導きによって、無自覚に陥り義務を怠る多くの若者に代わり、最も重要な敬虔と、最も尊い奉仕、そして来世に益

する境地にあった。願わくは、二年の病の
労苦が、無数の年に及ぶ永遠の生命の幸福
の因となったのである。

わたしがかつて彼らの健康を願って捧げた
祈りが、今にして思えば、現世的には呪い
であったことを理解する。願わくは、その
祈りが来世の健康のために受け入れられて
いるように。

この二人は、わたしの確信によれば、十年
の敬虔によって得られるほどの利得を得た
。もし彼らが、ある若者たちのように健康
と若さを頼み、無自覚と放縦に身を投じ、
そこへ死が待ち伏せして、罪の汚れのただ
中で捕えたなら、光の宝に代えて、墓は蠍
と蛇の巣となっていたであろう。

かくのごとき益が病にある以上、嘆くので
はなく、委ねと忍耐をもって、むしろ感謝
し、神の慈悲に信頼すべきである。

第十四の処方

眼に覆いを蒙った病者よ。もし、信仰あ
る者の眼に降ろされるその覆いの下に、い
かなる光と霊的な眼があるかを知るなら、

「慈悲深き主に十万の感謝を」と言うであろう。この軟膏を説明するため、一つの出来事を語ろう。

かつて、八年にわたり、完全な忠誠をもって、いささかも不快を与えずに私に仕えたバルラ出身のスレイマンがいた。その叔母の眼が、ある時、閉じてしまった。あの敬虔なる婦人は、私に対して身に余るほどの好意を抱き、「眼が開くよう祈ってほしい」と、モスクの門で私を捉えた。私は、その祝福された、いささか恍惚の境にある婦人の正しさを、祈りの取り次ぎとして、「主よ、彼女の正しさに免じて、その眼を開いてください」と願った。

翌日、ブルドウルから眼科医が来て、彼女の眼は開いた。しかし四十日後、再び眼は閉じた。私は深く心を痛め、多く祈った。その祈りは、願わくは来世のために受け入れられたのであろう。さもなくば、私の祈りは、彼女にとって甚だ誤った呪いであった。なぜなら、彼女の定められた時は、あと四十日しか残っていなかったからである。四十日後、アッラーの慈悲が彼女に及び、彼女は逝去した。

この婦人は、バルラの哀愁を帯びた庭園を、老いの眼で四十日眺める代わりに、墓の中で、樂園の庭園を四万日にわたって観ることを得たのである。彼女の信仰は強く、その正しさは深かった。

まことに、信仰ある者が眼に覆いを受け、そのまま閉じた眼で墓に入るなら、その位に応じて、墓の民よりもはるかに、その光の世界を観ることができる。この世において、我々が多くのものを見る一方で、盲の信徒が見えないように、墓においては、その盲の者たちが、信仰を携えて行くなら、墓の民よりもはるかに多くを見る。遠くを映す望遠鏡で眺めるかのごとく、墓の中で、その位に応じて、樂園の庭を映画のように観覧するのである。

かくのごとく、地の下にありながら、天の上の樂園を見ることができるその眼は、今この眼に降ろされた覆いの下で、感謝と忍耐によって得られる。その覆いを汝の眼から取り除き、その眼で汝を見させる医師は、英知のクルアーンである。

第十五の処方

嘆きと呻きをあげる病者よ。病の形だけを見て「ああ」と嘆くな。その意味を見て「よし」と言え。もし病の意味が美しきものでなかったなら、慈悲深き創造主は、最も愛する僕たちに病を与えなかったであろう。しかるに、確かな伝承にこうある。

أَشَدُّ النَّاسِ بَلَاءً النَّبِيُّ ثُمَّ الْوَلِيُّ الْأَمْلُ فَالْأَمْلُ

すなわち、「最も多くの試練と苦難を受けるのは、人々の中で最も善き者、最も完成した者である」。

アイユーブ様（平安あれ）をはじめ、預言者たち、次に聖なる人々、そして徳ある者たちが、彼らに降りかかった病を、純粹な礼拝、慈悲よりの贈り物として見なし、忍耐のうちに感謝した。彼らはそれを、慈悲深き創造主の慈しみから来る、外科的処置の一種として受け取ったのである。

嘆き叫ぶ病者よ。この光に満ちた隊列に加わりたのなら、忍耐のうちに感謝せよ。不平を言うなら、彼らは汝をその隊列に迎え入れない。無自覚の者たちの落とし穴に

落ち、暗き道に行くことになろう。

実に、ある種の病は、もし死をもって終わるなら、靈的殉教者として、殉教に等しい聖位をもたらす。たとえば、出産に伴う病である。³〔脚注〕また、腹痛、溺死、火災、疫病によって亡くなる者が靈的殉教者であるように、死によって聖位をもたらす、祝福された病が多く存在する。さらに病は、この世への愛着と結びつきを弱めるがゆえに、死による別離が、現世に執着する者にとって極めて痛ましいものであるのを和らげ、時にそれを好ましいものとさえするのである。

第十六の処方

苦悩を訴える病者よ。病は、人間の社会的生活において最も重要で、かつ最も美しい徳である尊敬と慈悲を教え込む。なぜなら病は、人を野蛮さと無慈悲へと駆り立て

³ 〔脚注〕 この病が靈的殉教をもたらすのは、産後の期間である四十日までである。

る「自足・独立心」から救い出すからである。

というのも、

اِنَّ الْاِنْسَانَ لِرَبِّهِۦٓ لَكٰٔفٍۭۭۭۭۭۭۭ
اِنَّ الْاِنْسَانَ لَیْطَغٰی اَنْ رَّاهُ اسْتَغْنٰی

この節の秘義が示すとおり、健康と安泰から生じる自足に陥った自己中心の魂は、尊敬されるべき多くの兄弟関係に対して尊敬を感じず、憐れみと慈悲を受けるに値する災厄者や病者に対しても、思いやりを抱かない。

ところが人は、病に倒れたとき、その病の中で自らの無力と貧しさを悟り、尊敬に値する兄弟たちに敬意を抱くようになる。見舞いに来る者、助けてくれる信仰の兄弟姉妹に対して、自然と尊敬の念を感じる。

さらに、人類的な繊細さから生じる人間的な慈悲、そしてイスラームにおいて最も重要な徳の一つである、災厄に遭った者への憐れみを感じるようになる。自らを彼らと同一視し、真の意味で彼らを憐れみ、思いやり、可能であれば助け、少なくとも祈り、少なくとも宗教的に推奨された作法と

して、様子を尋ねるために見舞いに行き、報いを得るのである。

第十七の処方

病を通じて善行ができないことを嘆く病者よ。感謝せよ。最も純粋な善行の門を汝に開いたのは、病である。

病は、病者自身に継続的に報いを与えるだけでなく、純粋な意図をもって病者を看護する者たちにも報いを与え、さらに祈りが受け入れられるための最も重要な手段となる。実に、病者を看護することは、信仰ある者にとって大きな功德である。

病者を煩わせぬよう配慮しつつ見舞い、その状態を気遣うことは、確立された宗教的慣行であり、罪の贖いともなる。伝承には「病者の祈りを得よ。病者の祈りは受け入れられる」とある。とりわけ病者が親族であり、特に父母であるならば、その奉仕は重大な礼拝であり、大いなる報いである。

病者の心を慰め、安心させることは、重要な施しに等しい。父母が病の時に、その

傷つきやすい心を満たし、善き祈りを受けることのできる子は、まことに幸いである。社会生活において最も尊ばれる真理である父母の慈愛に対し、病の時に完全な敬意と子としての慈悲をもって応えるその姿は、人間性の高貴さを示す忠誠の絵姿であり、天使たちさえ「なんと素晴らしいことか」と称賛する。

実に、病の時には、その苦痛を忘れさせるほどの、周囲に現れる思いやりと憐れみから生じる、心地よく安らかな喜びがある。

病者の祈りが受け入れられるということは、きわめて重要な問題である。私は三十年、四十年にわたり、自らの身体にある慢性的な病の癒しを祈り続けてきた。その中で悟ったのは、病は祈りのために与えられたということである。祈りによって祈りそのものが消え去らないことから、祈りの結果は来世的なものであると理解した。⁴〔脚注〕

⁴ 〔脚注〕ある種の病が祈りの存在理由であるとき、その祈りが病の消滅をもたらすなら、祈りは自らの不存在を招くことになる。これは成立しない。

祈りそのものが一つの礼拝であり、病によって人は自らの無力を悟り、神の御前に身を寄せる。ゆえに、三十年にわたり癒しを祈り続けても、祈りが表面的に受け入れられなかったからといって、祈りをやめようとは思わなかった。病は祈りの時であり、癒しは祈りの結果ではないからである。

もし至高にして英知と慈悲を備えた御方が癒しを与えられるなら、それは恩寵として与えられる。また、祈りが自分の望む形で受け入れられなかったからといって、それが受け入れられなかったとは言えない。創造主は、何が真に有益であるかを最もよく知っておられる。時に現世のための祈りを、来世の利益へと転じて受け入れられる。

いずれにせよ、病という秘義によって純化された祈り、とりわけ弱さ・無力・へりくだり・切実な必要から生じる祈りは、受け入れにきわめて近い。病は、そのような純粋な祈りの源である。ゆえに、信仰ある病者も、病者を看護する信仰者たちも、この祈りの恵みにあずかるべきである。

第十八の処方

感謝を捨て、不平に陥った病者よ。不平とは、本来は権利が侵されたときに生ずるものである。だが、汝のいかなる権利が失われたというのか。不平を口にする以前に、汝の上には、果たされていない感謝の義務が数多く積み重なっている。至高なる御方の権利を果たさぬまま、あたかも自らが不当に扱われたかのように、不平を述べているのである。

汝は、自分より高い段階の健康な者たちを見て、不平を言うことはできない。むしろ、健康の点で自分より下にある、困窮した病者たちを見て、感謝すべき立場にある。もし汝の手が折れているなら、切断された手を持つ者を見よ。もし片目を失ったなら、両目を失った盲人を見よ。そしてアッラーに感謝せよ。

実に、恩恵において自分より上を見ることで不平を言う権利は、誰にもない。災厄においてこそ、人は自分より重い災厄を負う者を見ることで、感謝する義務を負うのである。

この秘義は、いくつかの書において譬えによって説明されている。その要点は次のとおりである。

ある人物が、一人の哀れな者をミナレットの頂へと導く。その階段の一段一段ごとに、異なる恩恵と贈り物を与える。そして頂上において、最大の贈り物を授ける。これほど多様な贈り物に対し、感謝と謝意を期待されているにもかかわらず、その粗暴な者が、すべての段で与えられた恩恵を忘れ、あるいは無視し、感謝することなく上を見上げ、「このミナレットがもっと高ければよかったのに。なぜあの山や、あの別のミナレットのように、もっと高くないのだ」と不平を言い始めたとしたら、それがいかに大きな恩知らずであり、不正であるかは明らかである。

同様に、人は無から存在へと導かれ、石でもなく、木でもなく、獣のままでもなく、人として、さらにムスリムとして創られ、長きにわたり健康と安寧を与えられ、高い恩恵の段階を得ていながら、いくつかの付随的な事情によって、健康や安寧といった一部の恩恵を失った、あるいは自らの選

扱や誤用によって失った、もしくは手が届かなかったという理由で、不平を言い、忍耐を失い、「なぜこんなことが自分に起きたのか」と神の統治を批判するならば、それは物質的な病よりも重い、霊的な病である。

それは、折れた手で殴り合いをするようなものであり、不平そのものが病を増幅させる。賢明な者とは、

الَّذِينَ إِذَا أَصَابَتْهُمْ مُصِيبَةٌ
قَالُوا إِنَّا لِلَّهِ وَأَنَا إِلَيْهِ رَاجِعُونَ

この句の秘義に従い、身を委ねて忍耐し、病がその務めを終えて去るのを待つ者である。

第十九の処方

威光と美を備えた御方のすべての御名は、至高なる御名という完全性の表現において、すべて美であることを示している。被造物の中で、最も繊細で、最も美しく、最も包括的な完全性の鏡は「生命」である。美なるものの鏡は美しく、美の諸相を映し

出す鏡は、それ自体も美しくなる。その鏡に、美なるものから何を与えられても、それは美である。同様に、生命の上に何が訪れようとも、真理の観点においては、それは美なのである。なぜなら、それは美なる御名の美しい刺繍を映し出すからである。

もし生命が、常に健康と安寧の中で単調に進むだけであったなら、それは不完全な鏡となる。ある意味では、無や欠如を感じさせ、倦怠を生む。生命の価値を引き下げ、人生の味わいを苦いものに変える。人は「早く時間を過ごしたい」と感じ、退屈から放縦や娯楽に走り、まるで投獄期間のように、貴重な生を敵視し、早く消費してしまおうとする。

しかし、変化と運動、さまざまな状態の中を巡る生命は、その価値を実感させ、人生の重要性と味わいを知らせる。たとえ困難や災厄の中にあっても、人生が早く過ぎることを望まない。「ああ、太陽がまだ沈まない」「なぜ夜が終わらないのか」と嘆くこともない。

実に、極めて裕福で仕事もなく、完全な安楽の床にある人物に「調子はどうか」と

尋ねれば、「時間が進まない。何か遊びを見つけよう」「暇をつぶす娯楽がほしい」といった、苦悩に満ちた言葉を耳にするであろう。あるいは、過剰な期待から生じる「これが足りない」「あれをしておけばよかった」という不平を聞くであろう。

これに対して、災厄に遭った者、あるいは労働と困難の中にある貧しい者に尋ねてみよう。理性を保っているなら、こう答えるであろう。「主に感謝する。元気だ。働いている。太陽が早く沈まなければ、この仕事も終えられたのに。時間はすぐに過ぎ、人生は止まらず進んでいく。確かに苦労はあるが、これもまた過ぎ去る。すべてはこのように速やかに過ぎるのだ」と。

この言葉は、人生がいかに貴重であるかを、過ぎ去ることへの惜しみをもって、靈的に示している。すなわち、困難と労苦によって、人は人生の味わいと生命の価値を理解するのである。安楽と健康は、かえって人生を苦いものとし、その終わりを望ませるのである。

病の兄弟よ。すでに他の諸書において詳説し、かつ断定的に証明されているとおり

、災厄・悪・さらには罪に至るまで、その根源と本質は「無（欠如）」にある。無とは悪であり、闇である。単調な安楽、静止、沈黙、停滞といった状態が人に倦怠と苦悩をもたらすのは、それらが無と虚無に近く、その闇を感じさせるからである。

これに対し、運動と変化は存在であり、存在を実感させる。存在とは純粋な善であり、光である。真理がこのような以上、汝の病は、貴重なる生命を浄化し、強め、向上させ、身体に備わる他の諸機能を、その患部の周囲へと援助的に向けさせ、また英知ある創造主のさまざまな御名の刺繍を顕すといった多くの務めのために、汝の身体へ客人として遣わされたのである。

願わくは、その務めを速やかに終えて去り、安寧に向かってこう告げるであろう。「汝が来て、わたしの代わりに常住せよ。この家は汝のものである。安寧のうちに留まれ」と。

第二十の処方

病に対する薬を求める病者よ。病には二種ある。一つは真実の病、もう一つは思い

込みの病である。

真実の病については、英知と癒しを司る威光の主が、この地球という巨大な薬局において、あらゆる病に対する処方書を備えられた。その処方書は病を必要とし、すべての病に対して相応の薬が創られている。治療のために薬を取り、用いることは正当である。ただし、その効力と癒しは、創造主から来るものと認識せねばならぬ。薬を与えるのも主であり、癒しを与えるのも主である。

熟達し、信仰心ある医師の助言に従うことは、重要な薬である。なぜなら、多くの病は誤用、不摂生、浪費、罪、放縦、不注意から生じるからである。信仰心ある医師は、必ず正当な範囲で助言し、節度を勧め、誤用と浪費を戒め、慰めを与える。病者がその助言と慰めを信頼すれば、病は軽減し、苦悩の代わりに安らぎをもたらす。

他方、思い込みの病については、最も有効な薬は「重く受け取らぬこと」である。重く受け取るほど、それは肥大し、膨れ上がる。重く受け取らねば、小さくなり、消散する。蜂に構えば構うほど群がり、無視

すれば散るのと同じである。暗闇で目の前に揺れる一本の縄を恐怖として重く受け取れば、それは巨大な幻影となり、人を狂乱させることさえある。だが重く受け取らねば、それが蛇ではなく単なる縄であると知り、自らの慌てぶりを笑うであろう。

この思い込みの病が長く続けば、やがて実際の病へと転じる。被暗示性が強く神経質な者にとっては、害の大きい病である。些細なものを誇張し、精神の力を損なう。とりわけ、無慈悲な半端医や不誠実な医師に出会えば、その思い込みはさらに煽られる。富める者は財を失い、さもなくば理性を失うか、健康を失うことになる。

第二十一の処方

病の兄弟よ。汝の病には物質的な痛みがある。だが、その痛みの影響を打ち消す重要な霊的喜びが、汝を取り囲んでいる。もし父母や親族がいるなら、久しく忘れていた甘美な慈愛が、今ふたたび汝の周囲で目覚め、幼少の頃に向けられたあの優しい眼差しを、再び見ることになる。

さらに、これまで覆われていた周囲の友

情が、病の引力によって汝に向かい、愛情深く開かれる。ゆえに、この物質的痛みは、それらに比してきわめて軽い。加えて、汝が誇りをもって仕え、好意を得ようとしてきた人々が、病ゆえに今や慈しみをもって汝に仕えるなら、汝は主に対して主となったのである。

また、人間に備わる繊細な感受性と普遍的な慈悲を引き寄せ、無から有を得るがごとく、多くの助け手と情深い友を得た。しかも、きわめて骨の折れる務めからの休止命令を、病によって受け、安息を得ている。

これらの霊的喜びに照らすなら、汝のわずかな痛みは、不平ではなく感謝へと汝を導くべきである。

第二十二の処方

重き病、たとえば半身不随のような病に冒された兄弟よ。まず汝に吉報を告げる。信仰ある者にとって、半身不随は祝福と見なされてきた。わたしはかねてより、霊的完成者たちからこのことを聞いていたが、その秘義を知らなかった。ところが、次のような意味が心に浮かんできた。

神に到達し、この世の甚大な靈的危険から逃れ、永遠の幸福を確保するために、靈的完成者たちは、意図的に二つの原理を歩んできた。

第一は、死の想念である。すなわち、この世がはかないように、自らもまた、その中で務めを担うはかない旅人であると考えることによって、永遠の生命のために励んできた。

第二は、自己中心の魂と盲目的な感情の危険から逃れるため、苦行と節制によって、その自己中心の魂を抑え、無力化しようと努めたことである。

半ば身体の健康を失った兄弟よ。汝には、意図せずして、しかも容易で、幸福の原因となるこの二つの原理が与えられている。汝の身体の状態そのものが、常にこの世の消滅と人のはかなさを告げている。もはやこの世は汝を呑み込めず、無自覚は汝の眼を閉ざすことができない。

さらに、半身の状態にある者を、自己中心の魂は、卑しい欲望や肉的な衝動によって欺くことができない。かくして人は、その魂の災厄から速やかに解き放たれる。

このように、信仰の秘義、委ね、信頼によって、重き半身不随のような病から、短い時のうちに、靈的完成者の苦行と同等の益を得ることができる。そのとき、この重い病は、きわめて軽い代価となるのである。

第二十三の処方

頼る者なく、孤独で、困窮した病者よ。汝の病とともにある孤独と異郷の苦しみ、最も頑なな心さえ柔らげ、慈悲の眼差しを引き寄せるのであれば、どうして、クルアーンのすべての章の冒頭において、自らを「慈悲あまねく、慈愛深き御方」として示し、一条の慈しみの光によって、すべての母にすべての幼子への驚くべき慈愛を授け、毎春、その慈悲の顕現によって地上を恩恵で満たし、永遠の生命における樂園を、そのすべての美德をもって慈悲の一つの顕れとされる、慈悲深き創造主への信仰と帰属が、汝のこの異郷における孤独な病の中で、万事に代えて、その慈悲の眼差しを汝に引き寄せないことがあるか。

その御方が在り、汝を見守っておられる以

上、汝にはすべてがある。真に異郷にあり、真に孤独なのは、信仰と委ねをもってその御方に帰属しない者、あるいはその帰属を軽んじる者なのである。

第二十四の処方

無垢なる病児、ならびに無垢なる子ども同然の高齢者に仕える看護者たちよ。汝らの前には、きわめて重要な来世的交易が開かれている。熱意と精進をもって、その交易を獲得せよ。

無垢なる子どもたちの病は、その繊細な身体にとって一種の訓練であり、節制であり、将来この世の騷擾に耐え得る力を授ける注射のようなものであり、主による教育である。それは子どもの現世的生命に関わる多くの叡智を含むのみならず、大人における罪の贖いに代わって、子どもの靈的生命の清澄と、将来あるいは来世における靈的向上の原因となる注射のような病から生ずる報いが、父母の行為の帳簿に、ことに慈愛の秘義によって子の健康を自らの健康に優先する母の善行の頁に記されることは、真理を知る者たちの間で確立されている。

高齢者に仕えることは、甚大な報いを得るのみならず、彼ら、特に父母であるなら、その祈りを受け、心を満たし、忠実に仕えることが、この世の幸福と来世の幸福の双方の原因であることが、確かな伝承と数多の歴史的事例によって証明されている。老いた父母に完全な服従を尽くす幸いな子は、自らの子からも同じ態度を受ける。他方、父母を悲しませる不幸な子は、来世の罰のみならず、この世においても多くの災厄によって罰せられることが、数多の事例で明らかである。

まことに、高齢者や無垢なる者に仕えることは、単に親族に限られない。信仰の秘義によって真の兄弟性が成立している以上、信仰の人が彼らに出会い、尊敬すべき病の高齢者が助けを必要としているなら、心身を尽くして仕えることこそ、イスラームの要請である。

第二十五の処方

病にある兄弟たちよ。もし、きわめて有益で、あらゆる病に効き、真に味わい深い聖なる靈薬を求めるなら、汝らの信仰を発

展させよ。すなわち、悔悟と赦しの願い、礼拝と奉仕によって、その聖なる靈藥たる信仰と、信仰から生ずる藥を用いることである。

実に、現世への愛着と執着ゆえに、無自覚の人々は、あたかも世界ほどに巨大で病んだ靈的身体を有しているかのようである。信仰は、その靈的身体に一挙に癒しを与え、別離と消滅の打撃によって負った無数の傷から解放し、真の治癒をもたらすことを、われわれは多くの書において断定的に証明してきた。

詳述して煩わせぬため、簡潔に述べる。信仰の藥は、義務を可能な限り果たすことによって、その効力を現す。無自覚、放縱、自己の欲望、ならびに不正な遊興は、その靈藥の作用を妨げる。病は無自覚を取り除き、食欲を抑え、不正な快樂へ向かうことを妨げるがゆえに、これを活用せよ。

真の信仰から来る聖なる藥と光を、悔悟と赦しの願い、祈りと嘆願によって用いよ。至高なる御方が汝らに癒しを与え、病を罪の贖いとされんことを。アーミーン、アーミーン、アーミーン。

الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي هَدَيْنَا لِهَذَا وَمَا كُنَّا لِنَهْتَدِيَ لَوْلَا
أَنْ هَدَيْنَا اللَّهُ لَقَدْ جَاءَتْ رُسُلُ رَبِّنَا بِالْحَقِّ
سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
الْحَكِيمُ

اللَّهُمَّ صَلِّ عَلَى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ طِبِّ الْقُلُوبِ وَ
دَوَائِهَا وَ عَافِيَةِ الْأَبْدَانِ وَ شِفَائِهَا وَ نُورِ الْأَبْصَارِ وَ
ضِيَائِهَا وَ عَلَى آلِهِ وَ صَحْبِهِ وَ سَلِّمْ



第十七の書簡

(第二十五の光の補遺)

子を失った者への弔慰文

بِسْمِهِ وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يَسْبَحُ بِحَمْدِهِ

親愛なる来世の兄弟、ハーフィズ・ハー
リド・エフェンディよ。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
وَبَشِّرِ الصَّابِرِينَ الَّذِينَ إِذَا أَصَابَتْهُمُ مُصِيبَةٌ
قَالُوا إِنَّا لِلَّهِ وَإِنَّا إِلَيْهِ رَاجِعُونَ

兄弟よ、あなたの御子が逝去されたとの
報に、私は深く心を痛めた。

しかし الْحُكْمُ لِلَّهِ である。すなわち、裁定
はアッラーに属する。

出来事に満足し、定命に身を委ねることは

、イスラームの標章である。

至高なる御方が、あなたがたに美しき忍耐を授けられんことを。

また、亡き御子を、あなたがたにとって来世の備えとし、執り成しの者となされんことを。

ここに、あなた、そしてあなたのような敬虔なる信仰者たちにとって、大いなる吉報であり、真の慰めとなる「五つの点」を示す。

第一の点

英知なるクルアーンにおいて、

وَلَدَانِ مُخَلَّدُونَ

と示されている。その秘義と意味は次のとおりである。

信仰者の子で、思春期に至る前に世を去った子どもたちは、樂園において永遠に、愛らしく、樂園にふさわしい姿のまま、常に子どもとして在り続ける。そして、樂園へ入る父母の腕に抱かれ、永遠に歓喜の源となる。また、子を愛し、子を撫でるとい

う、最も繊細で甘美な喜びを、父母にもた
らす存在となる。

樂園には、あらゆる快樂が存在する。ゆ
えに、「樂園には生殖がないから、子への
愛情や撫育の喜びもない」とする言説は、
真実ではない。

この世において、わずか十年ほどの短い
年月、苦勞と悲しみを伴いながら子を愛し
、抱くことに代えて、純粹で苦しみのない
、何百万年にも及ぶ永遠の子への愛と撫育
を得ることは、信仰者にとって最大の幸福
の一つである。このことを、次の御言葉が
示し、吉報として告げている。

وَلَدَانِ مُخَلَّدُونَ

第二の点

あるとき、一人の人物が牢獄に入れられ
ていた。そこへ、愛らしいわが子が送り込
まれてきた。

その哀れな囚人は、自らの苦しみを味わ
うだけでなく、子を安らかにしてやれない
こと、子の世話による苦勞によって、いっ
そう心を痛めていた。

やがて、慈悲深き王が一人の使者を遣わし、こう告げる。

「その子は確かにお前の子である。しかし同時に、我が臣民であり、我が民である。われはその子を引き取り、美しい宮殿で養育しよう。」

その男は泣き、嘆き、

「私の慰めであるこの子を渡したくない」と言う。

すると、周囲の者たちがこう諭す。

「あなたの悲しみは、実のところ意味をなさない。もし子を思っただけの悲しみなら、その子は、この不浄で不快な牢獄に留まるより、安らかで幸福な宮殿へ行くのだ。もし自分のために悲しんでいるのなら、それもまた誤りである。子がここに留まれば、わずかな一時的利益があるかもしれぬが、それと引き換えに、子の苦勞によって、あなたは多くの苦痛と悲嘆を背負う。だが子が宮殿へ行けば、あなたには千の利益がある。なぜなら、その子は王の慈悲を引き寄せ、あなたのための執り成しの者となるからだ。王は、その子をあなたに会わせたいと望むであろう。その際、王は子を牢獄へ

遣わすことはない。むしろ、あなたを牢獄から出し、その宮殿へ招き、子と再会させるであろう。ただし、それは王を信頼し、王に従うならば、という条件のもとであるが」

この譬えのとおりである、親愛なる兄弟よ。

汝のような信仰者は、子が世を去ったとき、次のように考えるべきである。

この子は無垢であり、その創造主は慈悲深く、寛大なる御方である。

わたしの不完全な養育と限られた慈愛に代えて、完全なる御配慮と慈悲のもとへ引き取られたのである。

苦悩と災厄と労苦に満ちたこの世の牢獄から解き放たれ、至高の樂園へと送られたのだ。

この子はいかに幸いであろうか。

もしこの世に留まっていたなら、将来どのような姿になっていたか分からない。

ゆえに、わたしはこの子を憐れまない。むしろ幸福であったと知る。

また、自らの利害のためにさえ、わたしは嘆かず、深い悲嘆に沈むこともない。

なぜなら、この世に留まっていたなら、十年ほどの、苦しみを伴う一時的な親子の愛情を得ただけであろう。

仮に善き子となり、世俗の務めに有能であったなら、わたしを助けてくれたかもしれぬ。

しかしその死によって、永遠の樂園において、何千万年にもわたり、親子の愛の源となり、永遠の幸福へと導く執り成しの者となったのである。

疑わしく、即時に失われる一つの利益を失い、確実に後に得られる千の利益を得た者が、どうして激しい悲嘆を示し、絶望の叫びを上げようか。

第三の点

亡くなった子は、慈悲深き創造主の被造物であり、所有であり、しもべであり、その全存在をもって御方の作品である。

父母にとっては、ただ一時的に預けられた同伴者にすぎなかった。

父母はその子に仕える者とされ、その奉仕の即時の報いとして、甘美なる親心を授けられた。

今、その子に対して千九百九十九分の所有権を有する慈悲深き創造主が、慈悲と叡智の要請として、その子を引き取り、奉仕の任を終えさせたのである。

このとき、わずかな見かけの取り分に固執し、真の千の取り分を持つ御方に対して、訴えにも似た絶望の嘆きを発することは、信仰者にふさわしい態度ではない。

それはむしろ、無自覚と迷妄の徒にふさわしいものである。

第四の点

もしこの世が永遠であり、人が永遠に留まり、別離が永遠であったなら、痛切な悲嘆や絶望の苦悶にも意味があったであろう。

しかし、この世は宿泊所にすぎない。

亡くなった子が行ったところへ、我らもまた必ず行く。

この別れは、その子一人に限られたものではなく、万人が通る道である。

しかも、別離は永遠ではない。

やがて中間世界において、そして樂園において再会する。

ゆえに、 **الْحُكْمُ لِلَّهِ** と言うべきである。

御方が与え、御方が取られたのだ。

「いかなる状況においてもアッラーに讃美あれ」と、忍耐と感謝をもって受け止めるべきである。

第五の点

神の慈悲の最も繊細で、美しく、快く、愛らしい顕れである慈愛は、光に満ちた靈薬である。

それは恋よりも鋭く、速やかに至高なる御方への到達をもたらす。

比喩的な愛や世俗の愛が、多くの困難を経て真の愛へと転じ、神に至るように、

慈愛もまた—しかも困難を伴わず、より短く、より純粋な形で—心を神へと結びつける。

父であれ母であれ、子を世界そのもののよう愛する。

その子が奪われたとき、もしその者が幸いであり、真の信仰者であるなら、

この世から心を背け、真の恩与者を見いだす。

「この世ははかない。心を懸けるに値しない」と言い、

子が行った先へと心の志向を向け、深い靈的境地を得るのである。

無自覚と迷妄の徒は、これら五つの真理に含まれる幸福と吉報から締め出されている。

その悲惨さは、次のようにして量ることができる。

最愛の一人息子が死の床にあるのを見ながら、

この世を永遠であると錯覚し、死を無とし、永遠の別離と考え、

柔らかな寝床の代わりに墓の土を思い浮かべ、

慈悲の中の慈悲者の樂園も、恩恵の至高の園も思い至らぬとき、

その者がいかに絶望的な悲嘆と苦痛に沈むかを、想像してみるがよい。

しかし、両界の幸福への道である信仰とイスラームは、信仰者にこう告げる。

死の床にあるその子の慈悲深き創造主は、その子をこの汚れた世から引き出し、樂園へ導かれる。

その子は汝のための執り成しの者となり、
永遠の子となる。

別離は一時的なものである。恐れることは
ない。

اَلْحُكْمُ لِلّٰهِ * اَنَا لِلّٰهِ وَاَنَا اِلَيْهِ رَاجِعُونَ

と言い、忍耐せよ。

اَلْبَاقِي هُوَ الْبَاقِي

残るのは、ただ永遠なる御方のみである。

サイード・ヌルスィー



第二の光

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
إِذْ نَادَىٰ رَبَّهُ أَنِّي مَسَّنِيَ الضُّرُّ وَأَنْتَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ

忍耐の英雄、預言者アイユーブのこの祈りは、経験に照らしても確かであり、またきわめて力強いものである。ただし、御言葉からの引用という形において、われらが祈りに用いるならば、

رَبِّ إِنِّي مَسَّنِيَ الضُّرُّ وَأَنْتَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ

と言うべきである。

預言者アイユーブの著名な物語の要点は、次のとおりである。

多くの傷と腫れに覆われ、長きにわたりその病を負っていたにもかかわらず、その病に伴う大いなる報奨を思い、完全なる忍耐をもって耐え続けた。

しかし、傷から生じた虫が、心と舌に及ん

だとき、すなわち、神を想起し、神を知る場である心と言葉に触れたため、神への奉仕が妨げられることを憂え、自らの安楽のためではなく、神への奉仕のためにこう祈ったのである。

「主よ、災いがわたしに触れました。それが舌による想起と、心による奉仕を妨げています。」

このようにして、純粹で、澄みきり、何ら私的な意図を含まぬ、ただアッラーのための祈りを捧げたところ、至高なる御方は、それを驚くべき形で受け入れ、完全なる健康を授け、あらゆる慈悲をもって包まれたのである。

この光には、五つの要点がある。

第一の要点

預言者アイユーブの外面的な傷と病に対応して、われらには内面的・靈的・心的な病がある。もし内が外となり、外が内となって現れたならば、われらは、アイユーブ以上に傷つき、病んでいる者として映るであろう。

なぜなら、われらが犯す一つ一つの罪、心に入り込む一つ一つの疑念は、心と魂に傷を刻むからである。アイユーブの傷は、この世の短い生命を脅かすものであった。しかし、われらの霊的な傷は、きわめて長い永遠の生命を脅かしている。

ゆえに、あのアイユーブの祈りを、われらは彼以上に、千倍も必要としている。

とりわけ、彼の傷から生じた虫が心と舌に及んだように、われらにおいても、罪から生じた傷と、そこから生まれる囁きや疑念が（アッラーの御守りを乞う）、信仰の座である内奥の心に触れて信仰を損ない、また信仰の翻訳者である舌の霊的歓びに触れて、想起から嫌悪をもって遠ざけ、沈黙させるのである。

まことに、罪は心に染み込み、黒く、さらに黒くして、ついには信仰の光を追い出すまで硬化させる。あらゆる罪の中には、不信へと通じる道が潜んでいる。もしその罪が、速やかに悔悟と赦しの願いによって消し去られなければ、虫どころか、小さな霊的な蛇となって心を噛む。

たとえば恥ずべき罪を密かに犯した者が、他人に知られることを極度に恥じるとき、天使や靈的存在の存在さえ重荷に感じ、わずかな兆しを口実に、それらを否定したいと望むようになる。

またたとえば地獄の刑罰を招く重大な罪を犯した者が、その警告を耳にするたび、悔悟によって防壁を築かなければ、魂の奥底から地獄の不存在を望むようになり、わずかな兆しや疑念によって、地獄否定へと踏み出す勇氣を得てしまうのである。

またたとえば、定められた礼拝を行わず、奉仕の務めを果たさない者が、下位の上司から些細な職務怠慢を理由に叱責されただけで深く心を痛めることがある。そのような者が、永遠無始無終の王の反復される命令に対し、義務の礼拝において怠慢を犯すならば、はるかに大きな内的苦痛を受ける。その苦痛から逃れたいがために、心の奥でこう望む。

「いっそ、その奉仕の務めなど無ければよいのに」と。

この願望から、神に対する靈的な反感をほのめかす否定の欲求が芽生える。

もし神の存在に関する一つの疑念が心に入れば、それに確証のようにすがりつきたくなる。

かくして、大いなる破滅の門が開かれる。

この不幸な者は知らない。否定によって、礼拝というごく僅かな負担から逃れたつもりで、実はその何百万倍も恐ろしい霊的苦痛へと自らをさらしていることを。

蚊の刺し傷から逃れようとして、蛇の咬傷を受け入れるようなものである。

これら三つの譬えから、次の御言葉の秘義が理解される。

بَلْ رَانَ عَلَى قُلُوبِهِمْ

第二の要点

第二十六の言葉において、定命の秘義について述べたとおり、災厄や病において、人が不平を述べる権利は、三つの点から存在しない。

第一の点

至高なるアッラーは、人に着せた身体という衣を、その御業の顕現とされる。人を一つの模型とし、その身体の衣を、その上

で切り、整え、替え、変化させ、さまざまな御名の顕れを示される。「癒す御名」が病を要請するように、「糧を与える御名」は飢えを要請する。

その他も同様である。

مَالِكُ الْمَلِكِ يَتَصَرَّفُ فِي مُلْكِهِ كَيْفَ يَشَاءُ

第二の点

生命は、災厄や病によって浄化され、完成し、力を得て、向上し、結実し、成熟する。

それによって生命の務めを果たす。一様な安楽の床にある生命は、純粋な存在であるよりも、むしろ純粋な無に近く、そこへ向かう。

第三の点

この世は試練の場であり、奉仕の住処であって、享楽や報酬や褒賞の場所ではない。

奉仕と礼拝の場である以上、病や災厄は、宗教的義務を損なわず、忍耐するならば、その奉仕と礼拝に極めて適合し、力を与える。なぜなら、それらは一時間を一日の礼

拝に等しくするからである。ゆえに、不平ではなく、感謝が求められる。

礼拝には二種ある。一つは積極的な礼拝であり、これは周知のものである。

もう一つは消極的な礼拝であり、これは病や災厄によって、人が自らの無力と弱さを悟り、慈悲深き主へと避難し、主を想い、主に願い、純粋な礼拝を行うことである。この礼拝には虚飾が入り込まない。完全に純粋である。

もし忍耐し、災厄の報奨を思い、感謝するならば、そのとき一時間一時間が一日の礼拝となる。短い生が、長い生となる。中には、一分が一日の礼拝に等しくなる者すらある。

実際、来世の一人の兄弟、ムハージル・ハーフィズ・アフメドという者の恐ろしい病について、私は強い関心を抱いた。すると心にこう示された。

「彼を祝福せよ。彼の一分一分が、一日の礼拝となっている。」

事実、その者は忍耐のうちに感謝していた。

第三の要点

一、二の言葉において述べたとおり、人は誰しも過去の生を振り返れば、心と言葉に「ああ」か「おお」のいずれかが浮かぶ。すなわち、後悔するか、「讃美あれ」と言うかである。

後悔を生むのは、過去の快樂が失われ、別離したことから生じる靈的苦痛である。快樂の消滅は苦痛である。時として、一時の快樂が永続的な苦痛をもたらす。思い出すこと自体が、その苦痛を掘り起こし、後悔を流れ出させる。

これに対し、過去に経験した一時的な苦難が去ったことから生じる、靈的で永続的な喜びは、「アルハムドゥリッラー」と言わせる。

この自然な心情に加え、災厄の結果として得られる来世の報奨と、短い生が災厄によって長い生に等しくなることを思うならば、忍耐以上に感謝するであろう。

そのとき人は、「不信と迷妄を除くあらゆる状況において、アッラーに讃美あれ」

と言うべきである。

よく知られた言葉に、「災厄の時は長い」というものがある。まことに、災厄の時は長い。

しかし、それは一般に思われるように苦しいから長いのではない。長い一生に等しい生命的な成果をもたらすから、長いのである。

第四の要点

第二十一の言葉・第一の位において述べたとおり、至高なるアッラーが人に授けられた忍耐の力を、もし妄想の道に散らさなければ、いかなる災厄にも十分に対抗し得る。しかし、妄想の支配と人の無自覚、さらにはかない生命を永遠であるかのように錯覚することによって、忍耐の力を過去と未来へと分散させてしまうと、現在の災厄に対して忍耐が足りなくなり、不平を言い始める。

それは、あたかも（断じてそうではないが）アッラーを人々に訴えるかのような態度であり、きわめて不当で、しかも狂気じみた不平と不忍耐である。

なぜなら、過去の一日一日が災厄であったとしても、その苦しみはすでに去り、安らぎが残っている。痛みは消え、消滅に伴う喜びが残っている。苦難は過ぎ去り、報奨が残っている。ゆえに、不平ではなく、むしろ喜びをもって感謝すべきである。それらに背を向けるのではなく、むしろ愛すべきである。

その過去のはかない生は、災厄を通して、永続し、幸福な一種の生へと転じている。

それらの苦痛を妄想によって思い返し、忍耐の一部をそこへ浪費することは、狂気である。

また、未来の日々について言えば、まだ到来していない以上、その中で味わうであろう病や災厄を今から考え、不忍耐に陥り、不平を述べることは愚行である。

「明日、明後日は空腹になる、渇くであろう」と言って、今日一日中水を飲み続け、パンを食べ続けるのが、いかに愚かな狂気であるか。同様に、まだ存在しない未来の災厄や病を思い描き、今から苦しむことは、何の必然もなく、自らを虐げる極端な愚

かさであり、その者から慈悲と同情に値する資格を奪う。

要するに、感謝が恵みを増すように、不平は災厄を増し、慈悲に値する資格を奪う。

。

第一次世界大戦の最初の年、エルズルムにおいて、ある尊い人物が恐ろしい病に冒されていた。

わたしが見舞うと、彼は言った。

「百夜もの間、枕に頭を載せて眠ることができなかった」と、痛切な不平を述べた。

わたしは深く同情したが、ふと次のことが心に浮かび、こう言った。

「兄弟よ、過去の苦しい百日は、今や喜びに満ちた百日である。それらを思って不平を言うな。むしろ、それらを見て感謝せよ。未来の日々は、まだ来ていない。汝の主である慈悲あまねく御方の慈悲に信頼し、打たれてもいないのに泣くな。無から恐怖を生み、存在しないものに存在の色を与えるな。この今という一時を考えよ。汝に与えられた忍耐の力は、この一時に十分である。狂気の将軍のように振る舞うな。左翼の敵がまだ到来していないのに、右翼の敵

が左翼に合流したと錯覚して、中央の兵力を左右に分散させ、中央を弱体化させ、わずかな敵に中央を破らせるようなことをするな。」

さらに言った。

「兄弟よ、全力をこの一時に集中せよ。神の慈悲と来世の報奨、そしてはかなく短い生を、長く永続する生へと転じていることを思え。この苦い不平の代わりに、心地よい感謝を選べ。」

彼は大きな安らぎを得て、こう言った。

「アルハムドゥリッラー。病は十分の一に軽くなった。」

第五の要点

三つの事項がある。

第一の事項

真の災厄、害をもたらす災厄とは、信仰に及ぶ災厄である。宗教的災厄に対しては、常に神の御前に避難し、叫び求めるべきである。しかし、宗教に関わらない災厄は、真理の観点から見れば、災厄ではない。

その一部は、慈悲深き御方からの警告である。羊飼いが、他人の畑に入り込む羊に石を投げると、羊はその石から「これは害から救うための警告である」と悟り、満足して引き返す。それと同様に、多くの外面的な災厄は、神的な警告、神的な注意喚起である。

また一部は、罪の贖いであり、また一部は、無自覚を打ち払い、人間的な無力と弱さを知らせ、ある種の心の安定をもたらすものである。

災厄のうち、病という種類は、先に述べたとおり、災厄ではなく、むしろ神的な配慮であり、浄化である。伝承には次のようにある。

「熟した木が揺すられることで実を落とすように、マラリアの震えによって罪は落とされる。」

預言者アイユーブは、その祈りにおいて、自身の安楽のために癒しを求めたのではない。

舌による想起と、心による熟慮が妨げられたとき、神への奉仕のために癒しを求めたのである。

ゆえに、われらもこの祈りを用いるとき、第一の目的として、罪から生じた霊的・魂的な傷の癒しを意図すべきである。

物質的な病については、礼拝を妨げるに至ったとき、われらは避難し、助けを求めてもよい。しかしそれは、抗議する態度や不平を訴える仕方であってはならない。むしろ、自らを低くし、救いを乞う姿勢でなければならない。

われらがその御方の主権を認めている以上、その主権の立場から与えられたものに、満足することが必要である。

定命と運命に異議を唱えるかのように、「ああ」「おお」と嘆き、不平を述べることは、運命を批判する一形態であり、慈悲を疑う行為である。

運命を批判する者は、頭を壁に打ちつけて自らを壊す。慈悲を疑う者は、慈悲から締め出される。折れた腕で復讐しようとして、その腕を使えば、折損がさらに悪化するようなものである。

同様に、災厄に冒された者が、それを抗議的な不平と過度の心配をもって迎えれば、災厄は二倍に増す。

第二の事項

物質的な災厄は、大きく見れば大きくなり、小さく見れば小さくなる。たとえば、夜に目に幻が映ることがある。それに注意を向ければ向けるほど膨らみ、無視すれば消える。襲ってくる蜂も、刺激すれば群がり、気に留めなければ散っていく。

同様に、物質的な災厄も、重大視して関心を向ければ向けるほど大きくなる。心配という媒介によって、その災厄は身体を越えて心に根を張り、霊的な災厄をも生み出し、それに支えられて長引く。

しかし、その心配を、定命への満足と委ねによって取り除くなら、木の根を断つように、物質的な災厄は次第に軽くなり、やがて枯れて消える。

この真理を表すために、かつて次のように言ったことがある。

哀れなる者よ、嘆きを捨て、災厄において委ねよ。

嘆きは災厄の中の災厄、過失の中の災厄であると知れ。

もし災厄を与える御方を見いだしたなら、それは喜びの中の災厄、賜与の中の災厄であると知れ。

もし見いださぬなら、この世界すべてが苦悩の中の災厄、滅びの中の災厄であると知れ。

世界が災厄に満ちているのに、なぜ小さな災厄に向かって叫ぶのか。来たれ、委ねよ。

委ねをもって災厄の顔に微笑め。そうすれば、災厄もまた微笑む。災厄が微笑めば、小さくなり、姿を変える。

恐ろしい敵に対して笑みを向ければ、敵意が和解へ、敵対が戯れへと変わり、敵意は縮小し、消え去る。委ねをもって災厄に向き合うことも、まさにこれと同じである。

第三の事項

あらゆる時代には、その時代固有の判断がある。この無自覚の時代においては、災厄は姿を変えている。ある時、ある人々に

とって、災厄は災厄ではなく、神的な恵みである。

わたしは、この時代における病者や災厄に遭った人々を（ただし、災厄が信仰を損なわないことを条件として）幸いな者としている。ゆえに、病や災厄に反対する考えは、わたしの心に浮かばない。また、彼らを哀れむ感情も生じない。

なぜなら、わたしのもとに来た若い病者を見れば、例外なく、同世代の者たちに比して、宗教的義務と来世への結びつきが強いことを認めるからである。そこから、わたしは理解する。そのような者たちにとって、その種の病は災厄ではなく、一種の神적인恩恵である。

確かに、その病は、彼のこの世の、はかなく短い生命に苦勞をもたらす。しかし、それは永遠の生命に益をもたらし、一種の礼拝となる。もし健康を得たなら、若さの酔いと時代の放縱によって、病のもたらした心の状態を保つことはできず、必ずや放埒へと流れ込むであろう。

結語

至高の御方は、その無限の力と尽きることなき慈悲を示すため、人間のうちに無限の無力と限りなき貧困を織り込まれた。また、無限の御名の文様を顕現させるため、人間を、無数の方向から苦痛を受け取ると同時に、無数の方向から快樂をも受け取り得る一つの機械のごとく創られたのである。

その人間という機械には、幾百の装置がある。それぞれに異なる苦痛があり、異なる快樂があり、異なる使命があり、異なる報いがある。あたかも大なる人間である宇宙において顕現するすべての神名が、小なる世界である人間の中にも、全体性をもってその光を放っているのである。

健康や安寧、快樂といった有益な事柄が感謝を口にのぼらせ、その機械を多方面から使命へと駆動させ、人間を感謝の工場とするように、

災厄や病、苦悩、その他の刺激的・駆動的な出来事は、その機械の別の歯車を動かし、活性化させる。

それらは、人間の本性に埋め込まれた無力・脆弱・貧困という鉱脈を稼働させる。一つの舌によってではなく、各器官の舌によって、避難と救援要請の状態を生じさせるのである。かくして人間は、無数の筆を内包する動く一本の筆となり、その生命の頁、あるいは類像の板に、定められた生の軌跡を書き記し、神名への告示となり、讚美の詩篇としての姿を帯び、本性の使命を果たすに至る。



これは、光の書に強い渴望を抱き、その熟読によって覚醒に至った一人の医師に宛てた書簡である。

自らの病を診断し得た幸いなる医師よ、
真摯にして親愛なる友よ。

汝の熱情ある書簡が示した魂の覚醒は、
まことに祝福すべきものである。

知るがよい。存在の中で最も貴いものは生命であり、使命の中で最も貴いものは生命への奉仕である。そして生命への奉仕の中で最も貴いものは、はかない生命を、永遠の生命へと転化させるために努めることである。

この生命の価値と重要性は、永遠の生命への種子であり、出発点であり、源泉である点に存する。さもなくば、永遠の生命を毒するような仕方で、このはかない生命にのみ視線を縛りつけることは、一瞬の稲妻を、常住の太陽に優先する狂気に等しい。

真理の眼から見れば、誰よりも病んでいるのは、物質主義に沈んだ無自覚な医師たちである。もし彼らが、クルアーンの聖なる薬局から、解毒剤のごとき信仰の薬を受

け取ることができるなら、彼らは自らの病を癒すのみならず、人類の傷をも治療するであろう。

汝のこの覚醒は、汝自身の傷に軟膏となるだけでなく、医師たちの病に対する薬ともなる。

また、知っているであろう。

絶望に沈む病者にとって、霊的な慰めは、時に千の薬よりも有効である。

しかるに、自然主義の泥沼に溺れた医師は、哀れな病者の痛ましい絶望に、さらに一層の闇を加える。汝のこの覚醒が、かかる不幸な人々への慰めとなり、光をもたらす医師と汝を成すことを、願ってやまない。

汝も知るとおり、人生は短く、必要な仕事は多い。もし汝も、わたしと同じく己の頭脳を点検するなら、知識の中に、いかに多くの無用・無益・無意味な、薪の山のようにならぬものがあるかを見いだすであろう。わたしは点検し、実に多くの無用なものを見いだした。

ゆえに、あの科学的知識や哲学的教養を、有益で、光に満ち、魂を帯びたものとする道を探さねばならない。

汝もまた、至高の御方に覚醒を求めよ。
それは、汝の思考を全智なる至尊の御方の
ために方向づけ、薪に火を与えて光とし、
無用な科学知識を、尊い神的知识へと変え
るであろう。

賢き友よ。わたしの心は、理学の徒の中
から、信仰の光とクルアーンの秘奥に対し
、渴望の度合いにおいて必要を感じ取る人
々が、フルスィー・ベイのごとく立ち上
がることを切に望んでいる。

そして、諸書が汝の良心と語り合いうる
以上、それぞれの書を、わたし個人からの
ものではなく、クルアーンの仲介者からの
書簡、クルアーンの聖なる薬局からの処方
箋と見なすがよい。不在の中にあって、あ
たかも臨席の対話の場を、それらによって
開け。

また、望む時には、いつでもわたしに書
簡を送るがよい。たとえ返答がなくとも、
気を悪くしてはならない。わたしは昔から
、書簡を書くことが極めて少ない。事実、
三年来、兄弟からの多くの書簡に対し、た
だ一通の返書を書いたのみである。

サイド・ヌルスィー